

# 東アジア近代における知の再編成をめぐる

—日本文研国際シンポジウム 2008

## 序

国際日本文化研究センターは、東アジア近代における知の再編成をめぐる、中国、韓国、台湾の研究者と様ざまなかたちで共同研究を進めてきた。われわれが知的秩序を考察の対象にすえるのは、二〇世紀後期に国際情勢が大きく変化し、また地球環境問題など地球規模で考えなくてはならない課題が突きつけられている現実に対して、近代の知のしくみと価値観では対処しきれなくなっていること、その反省に立って、新たな学問の創成を目指すからにはほかならない。

東アジアの伝統文化は一九世紀から二〇世紀を通じて、西欧近代文明を受け入れ、大きく変貌を遂げてきたことは疑えない事実だが、「東アジアの伝統文化」は、そのように一言でまとめうる同一性を持ちながら、しかし、日中朝にはそれぞれ独自の文化が展開していたし、「西欧近代」の受け入れ方も、それぞれの歴史的文化的条件によってちがっていた。また二〇世紀への転換期からは、日本帝国主義が東アジアに支配地域を拡大し、それに伴って、いわゆる文化侵略も起こり、西欧近代の影響を受けた、しかし、西洋とは異なる一定の文化的同一性が作り出されていった。もちろん、それも各地域ごとに異なる様相を呈したものだ。知的秩序も、その例外ではない。

第二次大戦後の冷戦秩序は、中国大陆と台湾に異なる国家を、また朝鮮半島にはふたつの国家を併存させ、日本をふくめて、それぞれの間の文化的交流は著しく阻害された。これによって、地域間の文化的差異は著しく開いた。そして、前近代と近代のそれぞれの自国文化に対する認識は、この期間につくられたものが、今日まで主流となっている。

しかし、二〇世紀後期の国際情勢の変化と地球規模での交通・通信網の著しい発達、東アジア全域の文化交流を急速に促進している。その交流も世界に開かれたものとして展開しており、閉鎖的な文化空間を形づくるものではありえない。そして、それによって、今日の東アジアそれぞれの地域における知的秩序も、大きく変容を受けている。

その変容のひとつにトランス・カルチュア、トランス・ナショナリズムの動きのひろがりがある。これは、近代を通じて、それぞれに異なる国民国家体制の下で進展した「文化」や「民族主義」を超えて、互いに他を鏡とし、自らの独自性を相対化しうる知的主体のあいだにネットワークを作り出そうとする運動である。

国際日本文化研究センターは国際的・学際的な日本研究のために創設された機関

であり、また、その任に答えるべく運営されてきた。この知の運動とは十分に同調しうるし、積極的にその運動に場所を提供し、かつ、その一端を担うべきであろう。

総じて、東アジア近代における知の再編成を対象とする研究は、今日的課題であり、かつ、今日の国際学術の動向にもよくかなったものであるといってよい。継続的に拡大、深化をはかってゆくべきものと思う。

2009.11.29      鈴木貞美